

問題

次の文章は、水島司『グローバル・ヒストリー入門』の一部分である。これを読んで、設問の一～三のすべてについて答えなさい。

それでは、このグローバル・ヒストリーの意義とは、どのようなものであろうか。はじめに立てられるべき問いは、なぜグローバル・ヒストリーでなければいけないのか、従来の一国史のどこに問題があるのかという点であろう。（中略）

一国史が中心となってきたなによりも大きな要因は、近代という時代が国民国家システムの地球大の拡大というプロセスと軌を一にして展開してきたという事実であろう。国家形成、国民統合の過程で、それぞれの国家の存在の意義と正当性を示したのは国家の歴史すなわち国史であり、それが現在も変わっていないことは、歴史解釈の問題がしばしば内政や外交の重要な問題として浮上してくることからも明らかである。

（中略）

筆者は、国民国家システムの拡大とそこにおける国史^{a)}の意義を一概に否定しているわけではない。近代の歴史のなかで、ヨーロッパがいち早く国民国家をつくりあげ、その軍事力と経済力によって世界体制を築いたなかから、その体制に個として組み込まれ、飲み込まれ、従属の関係にはいつてしまうおもにアジアやアフリカの人びとが、やはり国民国家というかたちをとって対抗せざるをえなかったという状況の反映でもあるからである。それは、例えば十九世紀の後期から世界全体をおおいはじめる帝国主義体制に抗し、そこでの従属関係から脱して自律していこうとした場合に、家族、親族、部族のような血縁的繋がりや、村や町というような社会空間でそれは可能であったかどうかを思い浮かべれば明らかであろう。幕末から明治にかけての日本がそうであったように、人びとは国民国家に共同性を見出した。帝国主義支配に直接組み込まれた地域で、人びとは植民地状況からの脱却にいどみ、成しとげ、そうして国民国家体制が地球をおおうという現在の状況にいたったわけである。

しかし、二十一世紀にはいり、国民国家システムがさまざまな矛盾をかかえたものであることも明らかになってきた。そもそも、人と人との共同性は、領域性を基盤とするものもあれば、関係性に基盤をおくものもある。（中略）そうしたなかで、歴史的にみれば、しばしば領域性によって関係性を断ち切って成立した国民国家は、さまざまな歪みを内包せざるをえず、宗教紛争、エスニック紛争をはじめとした紛争が多発することになった。（中略）

現在の社会がかかえている問題は、もちろん国民国家システムの成立の経緯と関連するものだけではない。今日における個々人の世界観の多様化と、グローバル化・グローバル・ヒストリー^{c)}の多様化との非領域的な諸関係の錯綜のなかで、人びとが求めている共同性は、エスニシティ運動が求めるような領域の再線引きによる新たな国民国家の誕生が満足させうるようなものではありえないだろう。新たなありうべき人と人との関係のあり方を何を基盤にしてどう築くかが問われているのである。そして、そのような現在の人類の課題^{c)}に対して、グローバル・ヒストリーはこたえなければならぬ——こたえようとしているのである。

問一 傍線部(a)に関して、著者はなぜ「一概に否定しているわけではない」と主張しているのか。本文に即してその理由を簡潔に述べなさい。

問二 傍線部(b)に関して、国民国家がかかえる矛盾によって引き起こされた紛争の事例としてどのようなものがあるか。具体的事例を用いて、①いつ頃の時代で、②どの国のどのような問題であるかを簡潔に述べなさい。

問三 傍線部(c)に関して、グローバル・ヒストリーはどのようにに人類の課題にこたえたとあなたは考えるか。最初にグローバル・ヒストリーとはどのようなものか、その特徴をいくつか挙げて説明してから、その次にあなたの考えを論じなさい。（四〇〇字以上六〇〇字以内）